

「森銑三刈谷の会」だより No. 14

発行 2022年11月19日(月刊・メールでの投稿歓迎)
例会 第3土曜日 14:00-16:00 市中央図書館 参加自由

バックナンバー 刈谷市中央図書館>森銑三刈谷の会
共同代表 神谷磨利子・鈴木 哲 tetsu_s@katch.ne.jp



図 官報 第 2268 号 (大正九年二月二十七日) の広告面 (国立国会図書館デジタルコレクションより)。左半分は帝國記者森銑三編の「日本少年文庫」第一編『渡邊華山』第二編『松本奎堂』の広告。右半分『帝國』第三卷三月号の目次には日本少年文庫第三編より抜粋した「徳川家康 (少年史談)」が掲げられている。

第 14 回 (2022/10/15) 『帝國』編集者時代の森銑三」参加 16 人 (神谷磨利子)

森銑三は町立刈谷図書館での村上文庫整理の仕事終了後、1918 年 4 月より亀城尋常高等小学校代用教員として 5 年生の学級の担任になった。しかし、同年 11 月大道社発行の機関誌『帝國』編集者になるため刈谷を去り、上京する。銑三自身がその間のことについて書いた随筆「過去を語る 四」(『森銑三著作集』第 12 巻 pp.389-390) を読んで、『帝國』編集者とはどんな仕事だったのか、そこにどのような作品を発表したのか探ってみた。

今回確認したことの第一は、銑三を大道社に紹介してくれた西村醉夢先生(本名真次、1879-1943)と銑三との関係についてである。西村先生は雑誌『学生』(富山房、1910 年 5 月号-1918 年 5 月号)の編集主任であり、創刊号から読者であった銑三は、雑誌が出るたびに先生に感想などを送っていた縁から、先生の指導を受け、『学生』に投稿するようになった。1914 年 2 月号の『学生』には主筆・大町桂月選の評論の部で入選し、「自分の書いた文章の活字になった喜び」を初めて味わっている(「西村真次先生と私」『森銑三著作集続編』第 6 巻 p.458)。脚気にかかり帰郷した後、町立刈谷図書館時代にも文章修業を積み、西村醉夢選の美文の部、また評論の部と入選を重ねていた。西村先生は、銑三のその努力と文章力に期待して雑誌編集者の仕事を紹介したと推測される。

銑三は入社後早速、1919 年 1 月 1 日発行の第 2 巻第 1 号に「歴史小品」として楠正行の最期を描いた「四条噺」を発表している。刈谷図書館の時から歴史上の

人物の資料集めをしていたのであろう。「編集室より」には(森生)の署名で、新年号から編集に携ることになった喜びと気負いに満ちた言葉を載せている。

『帝國』に発表した銑三の文章は歴史小品、ラフカディオハーン(ラフカディオ・ハーン)の翻訳、刈谷時代についての随筆、「編集室より」に大別される。幅広い層の執筆者による寄稿の中に、これだけの分量の自分自身の原稿を載せる裁量が与えられていたことになる。刈谷の子どもたちのことを描いた随筆(筆名:刈谷新三郎)については、「森銑三刈谷の会」第 3、6 回でも話題にした。

編集者として銑三は西村先生の手ほどきで訪問筆記をし、辻善之助博士、大類伸(おおるいのぶる)博士を始めとして沼波瓊音(ぬなみけいおん)先生等、後の銑三の人生に影響を及ぼした多くの大学教授や研究者等と接している。

『帝國』編集の中で、「日本少年文庫」の企画は亀城尋常高等小学校校長の高須鉦吉先生の委嘱に応えたものであった。勝尾金弥『森銑三と児童文学』(1987 年、大日本図書 pp.253-259)に詳しい解説がある。第一篇『渡邊華山』(46 ページ)第二篇『松本奎堂』(38 ページ)第三篇『徳川家康』(50 ページ)、第四篇『鬼作左』(本多重次、1920 年 4 月号「編集室より」に予告)、第五篇『本多忠勝(本多平八郎)』(同 5 月号に抜粋)等、いずれも三河武士を取り上げている。当日の参加者から「刈谷の松本奎堂を取り上げている点からも高須校長の依頼に応えたことが分かる」との声があった。

大道社の内紛があり、銑三が『帝國』編集に関与したのは 1920 年 5 月号までのわずかに 1 年半であるが、その内容の充実ぶりには目を見張るものがある。出版された「日本少年文庫」三作は『赤い鳥』(1920.9)誌上で鈴木三重吉にその文章力を絶賛されるまでに至ったが、予告した続編を発行することは出来なかった。代用教員を辞職し雑誌編集者になることを許可してくれた高須先生の恩に報いるためにも、銑三は最後までこの仕事をやり遂げたかったであろう。

会終了後、銑三さんがどんな境遇にあっても文章修業をしている態度や、人との出会いを大切に生きる生き方に感嘆するとの感想が寄せられた。

今後予定

- 2022/11/19 (土) 長瀧秀雄「高崎南小学校代用教員時代の森銑三」
- 2022/12/17 (土) 森銑三の随筆を読む